

革命後のイラン情勢

——十四年の勤務を通じて——

有 吉 宏 之

最初の赴任——語学研修と大使館実務

私は二〇〇九年四月に追手門学院大学国際教養学部アジア学科の専任教員として採用され、主にオーストラリアの政治・外交を教えています。もともとの経歴を辿れば大阪外国語大学でベルシャ語を専攻し、外務省の専門職試験もベルシャ語で受験しました。一九六八年に入省して定年に至る四〇年間のうち在外勤務は約三〇年ですが、イランには三回、合計で一四年間勤務したので、もともと長い期間を過した外国といえます。

入省後すぐにイランに赴任しましたが、最初の二年間

は語学研修ということで、シーラーズ大学とテヘラン大学大学院でベルシャ語とベルシャ文学を勉強しました。ベルシャ語は日本でも学んでいたのですが、現地の新聞等を読んだり、ベルシャ語のラジオ放送を聴くことは困難ではありませんでした。しかし日本の大学の外国語教育の問題点といわれるように、会話力がほとんど備わっていなかったことを痛切に感じました。私は研究者としてではなく、外交官として交渉事に臨んだときに、イラン人のカウンターパートに引けを取らないベルシャ語を駆使することを求められていました。会話は現地の大学教授に個人授業を頼んで力をつけてもらいましたが、イランのように歴史と文学のある国は、単にベルシャ語を喋れるだけでは教養あるイラン人と対等に付き合えないことをしだいに悟りました。

外国語というのは、喋るだけなら単純に言葉だけ勉強すれば問題ないかもしれませんが、イランはフェルドーシーやサーデーイーなど、中東でも名の通った詩人や文学者を生んだ国です。庶民の生活の中だけでなく、官僚や政治家と懇談したり、食事をするときでもベルシャ詩人のフレーズが会話に出てきて、その意味を知らないといて行けないこともありました。私の会話は訛りの少な

いペルシャ語だと教授から褒められましたが、ペルシャ文学などの教養科目では勉強する時間がなかったことを、今でも後悔しています。

語学研修中は実務につかず大学で勉強していましたが、その後の四年間は在イラン日本大使館に勤務しました。勤務の初年は仕事を覚える目的で大使秘書と儀典事務を務め、続く三年は経済班に属して対イラン経済協力を担当しました。経済班の班長は通産省出向の書記官で、本来の経済関係だけで多忙だったので、経済協力は私が一人で手がけることになりました。その頃から日本の対イラン経済協力案件はうなぎのぼりに増えており、ペルシャ語ばかり勉強していた私には大変な仕事でした。最後の年には、その翌年にイランで開かれる予定のアジア大会のアタッシェという仕事も担当させられましたが、一九七四年、大会開催直前に勤務を終え、帰国することになりました。

当時のイランの政治体制は、パハラヴィー王朝が最盛期になりつつある時期で、中近東としては積極的に西欧文化を受け入れて近代化にまい進しており、国としてのエネルギーを外国人としても感じました。しかし、イランに対する米国の軍事プレゼンスがあまりにも大きくな

り、それに比べてイラン国内の貧富の差の拡大と欧米文化を無批判に受け入れるシャー体制に、将来への一抹の不安を覚えました。また宗教についても、イスラム教を否定するようなシャー体制がいかに国民から乖離していたかは、一九七九年にホメイニ革命が起きてから、ようやくその実態を知ることとなりました。初回在勤時代の私の偽らざる気持ちとして、中東の大国となったイランが、国内問題が原因で民衆革命が起きるとは考えられませんでした。

二回目の赴任―四大事件との遭遇

一九七四年に帰国して外務省で報道関係やイラン担当に携わり、一九七八年にイランに再び赴任しました。このときはわずか二年間（政務班で国内政治・外交を主として担当）という短い期間でしたが、私の外務省の勤務の中でもっともドラマティックな勤務経験だったと思います。なぜなら、二年間に四つの世界的にも大きな出来事に遭遇したからです。一つ目は一九七九年のイスラム革命の現場に居合わせたこと、二つ目は在テヘラン米国大使館占拠事件を経験したこと、三つ目はイラン・イラク戦争

に遭遇したこと、そして四つ目は隣国アフガニスタンへのソ連軍の軍事侵攻の報に接したことです。

一九七七年ごろからカーター米国大統領の人権政策の結果、イランでは反国王勢力が強くなっていました。一九七八年半ばの福田総理大臣の中東訪問では、イラン全土で宗教勢力が主導する反国王デモが吹き荒れる中、総理大臣一行がテヘランを訪問するという事態になり、当時外務省でイランを担当していた私は大変苦労しました。案の定、訪問直前にイランの内閣が交代し、また一行がテヘランを離れた直後に、イラン政府は全土に戒厳令を布告して反国王デモの鎮静化を図りました。しかし事態は更に悪化し、あつという間に倒れるはずがないと思われたシャー体制が崩壊し、シャーの国外亡命が最後の引き金になってホメイニが凱旋帰国し、一九七九年のイスラム革命が成功することとなりました。

革命政権はイスラム原理主義を中近東全体に広めるという政策を打ち出し、これに米国が重大な懸念を示しました。米国大使館占拠事件が起きたのは一月四日ですが、私はその二日前にも米国大使館を訪問し、大使館員と意見交換をしていました。大使館の前では多くのデモ隊が活動していましたが、イラン側の軍隊が警備をして

いたので、大使館員もそんな事件が起きるとは思っていませんでした。ただ外交のプロからみて、大使館の入口までデモ隊の接近を許すというのは、警備を行ったイラン側、および米国側にも不測の事態を予期できなかった責任があると思います。この事件に関連して対米協調派のバザルガン暫定政府が責任を取って辞職し、より対米強硬派の政権が誕生して、占拠事件を長引かせることになったのは、イラン・米国関係から見て残念なことだったと思います。

また、この機会にイランとの領土問題を軍事力で解決しようとしたイラクのサダム政権が、突然国境を突破してイランへの軍事侵攻を行い、イラン・イラク戦争が勃発しました。革命直後でまだ国内体制も固まらないイランでは、イラクに隣接した広大な領土を失ってしまうのではないかと不安もありましたが、難局を跳ね返し、戦争開始から二年後にはイラク軍をイラン領から退却させることができました。その後イラク軍は大量のスカッドミサイルを国境からテヘランにめがけて発射し、多大の被害をもたらしました。戦争は八年近くも続き、イランは膨大な人的および物的資源を失いましたが、一般的な評価としては、この戦争によってイランのイスラム革

命の地盤が固まったといえるかも知れません。

ソ連軍のアフガニスタン侵攻は、一九七九年二月二四日に起きました。イラン革命に続いてアフガニスタンでもイスラム原理勢力が勢力を伸ばしましたが、これに対してアフガニスタンの共産主義政権は有効な反撃ができず、ソ連はその「やわらかい下腹」といわれた中央アジアでイスラム原理主義が拡大するのを阻止する必要があります。アフガニスタンのオブザーベーション・ポストである在イラン日本大使館でも、アフガニスタンへのソ連の介入は大いにあるとの見方をしていました。それが現実になるとは思っていませんでした。二月二四日の夜一時、私はイラン国営放送の定時ニュースを聞いていましたが、その中で現地カブール特派員の連絡として、ソ連軍が国境を越えてアフガニスタンに進軍していると報じました。

当時はCNNもなく、われわれの情報はいいていBBCニュースで再確認していましたが、その時間はBBCニュースもなかったので再確認のしようがありませんでした。大使館幹部からの特別の指示もなく自宅にいと二五日の午前一時ごろから、カイロ、ベイルート、アンカラ、カラチなどの邦人特派員から国際電話が次々に入

り、ソ連がアフガニスタンに侵攻したという情報が流れているが、イランでは確認できないかと聞かれました。事実関係として、二四日午後十一時のイラン国営放送ニュースでは、特派員報告としてソ連軍が侵攻したことを報じていると返事しました。外務省から電話連絡があったのは二五日の午前二時で、イランではソ連軍の侵攻は確認できたのかとの指示でした。私は国営放送で確認していると返事し、国営放送のニュースの内容を東京の外務省に公電（電報による報告）するため、午前四時ごろ自分の車で大使館まで行きました。

当時のイランはイスラム革命が成功したばかりで、まだ各地に反政府組織のテロ活動があり、イラン全土は午後九時から午前六時まで戒厳令および外出禁止令が布かれ、道路の辻々にはコミテ（革命政府の民兵組織）のメンバーが銃を構えて警備していました。夜間のドライブはさわめて危険でしたが、どうしても仕事で大使館に行かなければならないときもありました。そんなときは車の室内灯をつけ、時速一〇キロで、車の窓はすべて開放しなければならぬきまりでしたが、それでも素人であるコミテの警備組織に誤って銃撃されるケースがあり、テヘランでの外国人（外交官を含む）の犠牲者は一〇名を超

えていました。

外務省の特殊語専門家の在外公館での大きな仕事の一つは、現地の新聞を詳細に読んで分析を行うことのほかに、テレビおよびラジオのニュースや解説を聴取して国内および外交の動きを分析することにあります。しかし当時のイラン国営放送は宣伝的要素の多い報道であり、反体制派の動き等はBBCラジオのペルシャ語ニュースで収集していました。イランでは毎日夕刻から、長いときは五時間近くペルシャ語ニュースが放送されるので、これを聴取するため夕食が真夜中になることもしばしばありました。イラン宗教界の動きなどはイラン国内のマスメディアではほとんど報道せず、日本でも知られていなかったもので、私がBBCペルシャ語放送ニュースでまとめた宗教界の動きは、外務省でも高く評価されました。

一九八〇年一月に二回目のイラン勤務を終え、次の勤務地であるオーストラリアのキャンベラに向かいましたが、イラン・イラク戦争が始まったばかりでイラク空軍機がテヘラン空港を爆撃し滑走路が使用できない状態だったので、陸路をソ連、ヨーロッパ経由でオーストラリアに向かう大旅行になりました。まずテヘランからカスピ海の港町バンダル・エンゼリまで車で行って一泊、

次の日の夕方にカスピ海を航行するソ連の貨客船でアゼルバイジャンのバクーまで一〇時間、バクーでアエロフロート国内便を見つけ、大雪で閉鎖される危険のあるモスクワ空港に到着、さらにモスクワからフランクフルト行きの日航機に乗り換え、フランクフルトよりシドニー行きのカンタス航空機に乗った時にはほっとしました。結局、二月二日にテヘランを出発しキャンベラに到着したのは一二月八日、なんと七日間かけて転勤した訳です。戦前の日本の外交官は、船で米国西海岸まで一週間とか二週間かかりましたが、飛行機が発達した今日、陸路・海路・空路を使い七日間かけて赴任することはまずないでしょう。

三回目の赴任―湾岸戦争の緊張

三回目のイラン赴任は、一九九〇年からの約六年間でした。前半の二年は広報班長、後半の三年半は政務班長を勤めました。前任地がアメリカのシアトルだったので、イラン・イラク戦争後の当地勤務に多少不安を持って赴任した記憶があります。私が着任したときは戦争終結からまだ二年たったばかりで、戦争で破壊された多くのイ

ンフラが回復しておらず、停電もほぼ毎日、五時間から八時間続くこともありました。都市ガスは被害が小さく料理の苦勞は少なかったのですが、それでも季節が冬になって、停電の影響で都市ガスによる暖房まで止まってしまうと、夜は毛布に包まっても寒さで震えが止まらず、悲しい気持ちになりました。ガソリンも不足し、ガソリンスタンドには長蛇の列ができていました。戦争による石油精製装置の爆破も原因ですが、もともとイランの原油は重質油で、生成してもガソリンや灯油があまり取れません。そのため現在でも石油輸出国でありながら大量のガソリン・灯油を周辺国から輸入して国内供給不足を補っています。

このときの在勤では、イラクによるクウェートの占領と一九九一年の湾岸戦争が大きな出来事でした。イラクをクウェートから追い払うために多国籍軍が編成され、いつイラクに対して軍事的作戦を展開するかが大きな問題でした。作戦開始の最大の要素は、多国籍軍に有効に對抗できるイラク空軍の戦闘機が臨戦態勢にあるのか、それとも「虎の子」の最新鋭戦闘機は地下の格納庫に退避させて、その後の反撃に使用するかという判断にありました。多国籍軍はその情報を十分有していなかった

と言われています。世界中に諜報網を張る米国が、一九七九年の在テヘラン米国大使館占拠事件を契機にイランとの外交関係を断絶したため、正確な軍事情報をイランから取れずに困っていたからです。この多国籍軍の攻撃決定を促した極秘情報は、なんとイラン人情報提供者より在テヘラン日本大使館にもたらされ、外務省を経由して米国政府に伝達されました。この話はすでに本になって出版されているので、秘密にする必要はないと思いますが、この経緯は次の通りです。

——日本大使館と付き合いのあったイラン人情報提供者が、偶然かどうかは不明だが、イラン西部にあるハマダンのイラン空軍基地を通りかかった際に、イラク空軍の最新鋭戦闘機（フランスのミラージュ戦闘機）十数機が基地の片隅に駐機していた。普通の民間人ではイラン空軍の戦闘機とイラク空軍の戦闘機は遠目から識別できないが、情報提供者は日頃からイラクの最新鋭戦闘機を写真等で見ていたようだ。彼の直感では、イラク政府がこの最新鋭戦闘機を多国籍軍の攻撃から守るためにイラン政府に依頼して退避させたのであり、イラク政府はその事実を隠して外交上の駆け引きを続けていたと判断した——。

後日談として、イラク政府はイランに退避させた戦闘機を戦争後は返還してもらえると当然思っていたらしいのですが、最終的にイランは戦闘機を没収してしまいました。イランは避難させたイラクの戦闘機を戦争が始まったら差し押さえることを、多国籍軍（または米国）に伝えていた形跡があり、イランの言質を元に多国籍軍はイラクへの軍事行動を開始したのではないかと、私も思っています。

当時のラフサンジャニ大統領は、ホメイニ直系派の政治家に比べれば中間的な立場に位置し、西側外交筋では関係改善が進むのではとの期待もありましたが、大統領が何らかの動きを見せるとハメネイ師を中心とする宗教右派勢力がこれを妨害するという構図は変わらず、具体的な進展が見られなかったのは残念な気がします。一九九六年三月にイラン在勤を終え、次の任地であるニュージールランドのウエリントンに向けて離任しましたが、そのときは本当のところ、あと一〇年イランに勤務してもいいと思うほどイランが好きになっていました。それからイランを離れて一五年近くたち、今はより冷静にイランのことは見ることができるようになりました。外交官はある国を好きになると盲目的になって客観的、冷静な

判断ができなくなるといわれましたが、まさに私とイランとの関係も、当時はそのような状態だったのかも知れません。

私の人生のうち、一四年のイランでの勤務と大学での四年間のペルシャ語の勉強を考えると一八年間イランとの関わりを持つてきたわけです。イランへの最初の赴任のときはもつと華やかで楽しいヨーロッパで研修できたらと、ヨーロッパ言語を研修する同期をうらやましく思いましたが、今となつてはイランとペルシャ語を選んで人生に悔いはないと考えています。イランはイスラエルや米国をめぐる国際政治においては異端児として疎んじられていますが、そのようなことでイランなりペルシャ文化がその歴史的価値を失うものではないと考えます。イランの人々は親切で、また深いペルシャ文化をまとった人々がたくさんいます。イランを欧米的視線から見るとではなく、もつと視線を変えて見れば、その歴史や文学の素晴らしさが分かってくるのではないかと思います。これからいろいろな場で勉強できる機会があれば幸せです。